

# 21世紀にキリストを生きる

## 21世紀にキリストを生きる

### 21世紀の世界—変化のうねり

<2005年末の衝撃>

あれは、インド洋大津波復興支援で一年が怒涛のように明け暮れた2005年があと2日で終わるといふ暮れのことだった。一年の激動とその激動で露わになった国際団体内の緊張関係の意味を思い巡らしていたとき。大掃除の合間にふと、目を留めたドキュメンタリーに私の目は釘づけになった。インドの今後の経済予測を報じるものだった。2003年以来、毎年数か月を過ごすようになっていた。人々の生活に今も息づく身分制度の過酷さ。それに伴う貧困。この慣習を無意識に受け入れているインド社会で、まず、キリスト者からこの「見方」を変革するときだという確信を与えられた人々と交わり大きな触発を受けていた。そのインドで十数年以内に半数の人口が中流になるという。IT産業の世界的な全盛を迎え、この分野の高等教育に力を入れてきたインド人の世界的活躍と経済躍進は目覚ましいものがあった。番組では5-6億人に達する膨大な中間購買層の出現による世界経済効果を予測していた。インドの大転換期が胸に迫ってきた。同時に最下層の貧困の人々にとってどのような影響もたらされるのだろうかと不安になった。機会をつかむことができないままさらに下層に沈んでいくかもしれない3-4億人の人々。

二十年近く前の1987年に、私は聖書のキリストから「世界のもっとも顧みられな

い人々に仕えるように」と呼び出された。世界転換期を告げる2005年末の衝撃的な知らせに最も底辺の人々の生活を結びつけると、今までとは違うアプローチの必要性を心のどこかで直感した。これからの21世紀に世界と社会、そして人の見方はどのようにあることを神様は示されようとしているのだろうか。この思い巡らしが私の心の中で静かに進行し始めた。

<2010年の世界—世界銀行の分析>

この予測を知ってから4年。2009年終わり、世界銀行は一つの分析結果を発表した。「富める北の国と貧しい南の国という世界の構図は終焉」したと。代わって、世界のどこの国でも経済的貧富の差が拡大するようになった。グローバル化によって新たな機会を得た各国の持てる層は急速に資産を膨らませている。貧しい層はどこでも、これらの機会の外に押しやられている。

20世紀には、世界の問題は経済が成長し科学技術が発展することで解決に向かうと私たちは信じていた。ところが、経済のもののさが重要視される社会では、欧米や新興国、そして日本でも自分のために他の人を利用することが当たり前になり、崩壊した家庭や他の人に無関心な層が増大してしまっている。

私はいま、宇宙の統治者である神に問われている。

『世界は大きく変わっていく。私の語りかけに耳を澄ませているか?』と。

「どうして今のときを見分けることを知らないのか。」

## 立ち上がる「声なき者の友」

<「このままでいいはずがない！」>

この数年間、アジアやアフリカで私の心に深く留まり続ける現地の人々がいる。この人たちの共通項はなんだろうと思い巡らしてみた。到達した結論は、この人たちはみな、自分が関わる分野、地域、そして地域教会の課題やあり方に「このままでいいはずがない！」と危機感を抱き続け、ある日、立ち上がった人々だった。

彼ら、彼女らの立ち上がり方には共通項がある。まず、自分の関わる分野や地域の本来あるべき姿が聖書に照らしてどうかを見極める努力を続けている。多くの人々がやっていることだからといって、安住しない。自分が関わる集まりや分野、教会で人々がもっと生き生きする何かがあるはずだ！まだ何か欠けている！と心の中で追求する。

彼らは、人が本来、どう生かされるべきか思い巡らし続けている。自分も含めて人はみな問題を解決し、より良い社会を目指す主人公として造られている。だから、そのように生き、生かされているだろうか、と。彼らは不正や偽りによって屈辱を受け損失を被っても、犠牲者として打ちのめされ続けるようには造られていないと信じている。人のせいだから、また、私にはなににもできないと絶望しかかる人に「あなたの内側に可能性の光がある。」と思い出させる。

いざ、彼らが立ち上がると、誰かに邪魔もされるし、しばしば自分が損する状況に

出会い、リスクも引き受けなくてはならない。それでも彼らは「このままでいいはずがない！」という自分の中に湧き上がった深い確信を手放すことはない。その確信で動く。彼らと出会い、そのビジョンと覚悟を聞くと、私のうちに必ず深い尊敬の思いが芽生えてくる。

「このままでいいはずがない！」神が静かにささやく声を聞き、人が本来の姿で生かされていないことに深い渴きを覚える人々。どこの国であっても、小さなことでも彼ら、彼女らはこの時代の変革者として神が立てられた「声なき者の友」なのだ。

<21世紀のアプローチへの答え>

この数年間、私の心の中で思い巡らしてきた「21世紀の新たなアプローチ」への答えが、このような人々にあることがとてもはっきりしてきた。このような人々を捜し求めてみる。彼らはちっぽけなからし種のようにひっそりとしてはいる。けれども、自分の関わる分野や地域で聖書を生き、地道に影響力を広げ、砂漠のような状況に森を作り出していることに気づかされる。

「声なき者の友」は騒がしくない。無力感に沈むことなく、そっと声なき者の側に立ち、聖書の神に期待して人々の内側に与えられている揺るがないものに気づかせてくれるのだ。

21世紀が直面する世界の課題に対して神が用意されていた答えは、神のささやきを聞き逃さず、行動に移すときは犠牲をいとわないひっそりとした人々だった。

「彼は争わず、叫ばず、その声を聞くものは大通りにはいない。正義を勝利に導くまで、彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。」

## 「人が輝くいのちの原則」 — 21世紀の生き方

<聖書をどのように読んでいたか？>

最近、聖書を読み、深く胸を刺され「こ

の言葉通りに実行しなければ」と自分の生

き方を変えるように迫られ、自分の習慣変革まで徹底した記憶があるだろうか。

5月の終わりから西アフリカのガーナに出かけ、「隣人を愛する習慣作り」セミナーの指導者リフレッシュ・セミナーに参加した。この集まりは、「このままでいいはずがない」という思いを行動に移した人々が、「人が輝くのちの原則」の宝庫の聖書を実践に移す学びの場である。この「いのちの原則」に人と社会を変革する驚くべき力があることに心が揺さぶられる思いだった。自分を振り返ると、この「いのちの原則」を習慣にすることにどれほど言い訳を並べてきたか思い当たる。セミナーに参加したアフリカの人々も、すばらしい原則であって習慣にすることがどれほど大変か、人に伝える前に自分が越える壁の高さを語っていた。同時に少しでも原則を生きてみると人間の計画や考えでは思いもしなかった不思議な恵みの経験をした、という。「人が輝くのちの原則」を習慣にする決心が、目に見えない神を信じる「信仰の歩み」なのだ、と気づいたという。宝の山の聖書を読んでも「宝の持ちぐされ」になる危険を思わされる。今、私は「聖書を読む思考と行動回路の修復」という課題と格闘し始めている。

＜隣人を自分のように愛しなさい＞

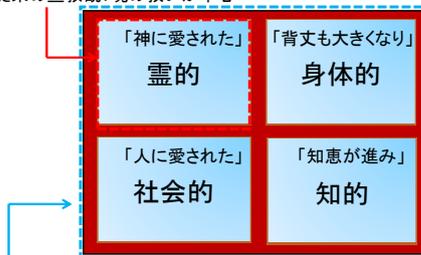
キリストに従う決心をした人が良く知る「あなたの神である主を愛しなさい。」という戒めと共に、最も重要な戒めとして教えられるのが「隣人を自分のように愛しなさい」である。さて、私たちはどのように隣人を愛そうとしているだろう。そもそも、隣人をどのように見ているだろうか。この

会合では、キリストを模範にすることで、私たちに欠けていた人間のすべての側面を見る見方と「隣人を愛する」訓練を強調していた。その見方が次の図である。

人としてバランスの取れた成長を目指す全人成長モデル

ルカ2:52 イエスはますます知恵が進み、背丈も大きくなり、神と人とに愛された。

従来の宣教観:魂の救いが中心



聖書の人の見方:人の全側面の成長を促し、「人が輝く」社会を目指す

20世紀の壮大な社会実験だった「社会主義革命」は、共同体としての社会性と目に見える身体・経済の新制度創出に力を注いだ。造り主である神を無視したため、モラルが無くなり社会が崩壊したのかもしれない。一方、キリスト教の国々から19世紀以降広まった自由資本主義は、個人の自由と産業革命・技術革新を劇的に発展させモノが豊かな社会になった。残念ながら、共同体として支えあう社会形成を軽んじたため、一昨年のリーマン・ショックに見る「普通の人々の強欲の暴走」という結果を招いた感がある。何よりも、どちらの経済・社会体制も知恵の宝庫である聖書から真理を汲み出し知恵を得ることを忘れてしまったため、崩壊したように思えてならない。

21世紀は、すべての民族がもう一度、聖書の原点に立ち返り「人が輝くのちの原則」に沿った全人成長の生き方を個人が選択し、全人成長を促す社会形成に関わるように促されていることを、アフリカの人々の静かな格闘から挑戦されている。

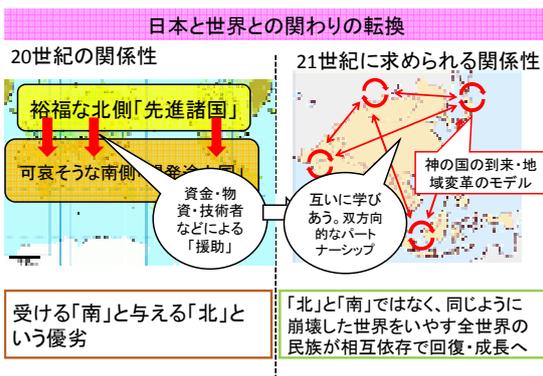
21世紀のこの時代は、人も社会も「いのちの法則」か「死の法則」のどちらかを選ぶように問われている。世界のキリスト者が立ち返るべきところを示せることを心から祈る。

「わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。」

## 「声なき者の友」の輪 立ち上げ

＜日本と世界との関わりの変換＞

21世紀は、日本も世界の国々も貧富の格差が拡大するという共通の課題に直面している。私がこの数年間、繰り返し思い起こされる世界との関係は、20世紀の「優劣・支配関係」ではなく、違うものを生かし補い合う「相互依存」の21世紀の関係である。それは、この図のように表わされる。



21世紀に声なき人々に心を動かされて、地域と社会の変革に立ち上がり始めた人々が、「人を生かす」地域社会や各分野、教会の地域貢献という21世紀のモデルを黙々と立てあげている。

日本でも世界でも「み国が来ますように。み心がおこなわれますように、…地の上にも。」という祈りの実現は、自分にも託されたものだとして立ち上がった「声なき者の友」とつながりたい。数か月間の祈りのなかで、この『輪』を数人の仲間と共に広げる歩みを始める決断をした。皆さまの祈りでこのご報告まで導かれたことを心から感謝して。

あふれる主の恵みを皆様の上に祈りつつ。

柳沢 美登里

2010年7月12日

\*\*\*\*\*

### 「声なき者の友」の輪の“ビジョン”

すべてが共に喜ぶ社会

#### 目的

わたしたちのまちと国、そして世界で、「すべてが共に喜ぶ」社会を目指す。

- わたしたちのまちと世界に暮らすひとりひとりが手を取り合って輪を作り、心とからだ、人との関わり、そして魂というすべての面において本来の姿に回復し、人が「輝くいのち」に生き、お互いに成長しあうように貢献する。

#### 働き

- 地域の人々の隣人となる願いを持って活動するさまざまなグループに「人のすべての面の回復とお互いの成長に貢献する習慣づくり」のガイドライン、セミナー、フォローアップの提供
- 同様の変革に取り組む世界の人々との相互交流推進
  - ⇒ 青少年向け「人のすべての面に関わる地域変革活動」短期研修(2-3週間)
  - ⇒ 地域社会と各分野で「人を生かす」モデルづくり活動へ研修生派遣(6か月-2年)
  - ⇒ 世界の「隣人の輪」を広げる活動、「人を生かす」モデルづくり活動家の講演・学習会開催
- 相互成長のあり方で、世界と日本の地域社会と各分野で「人を生かす」21世紀の新しいモデルづくりに協力(種資金支援を含む)

このような始まりに導かれた「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、是非、お祈りとお支援をよろしくお願いいたします。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

私へのご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共に進める機会を主に期待して。